平成 28 年 2 月 1 日　　第 195　号

教職員として、私達の学生を見て、学校がなにかしなければいけないこと、してあげたいこと、そんなことはないでしょうか。

FD・SD news

それぞれができること、したいことから一歩一歩取り組んでいきたいと思います。私たちの学生のために私たちができること、それを積み重ねて、日本一の宮崎学園短期大学にしようではありませんか。

記憶のアルバム　（保育科　泰田 久史）

実習前指導の中で、保育園の園長先生の話

を聞く機会があり、貴重な現場の話を興味深く聞いた。熱心なお話とともに、スクリーンに映し出される園児の姿を見ていると、何ともいえない懐かしい感覚を覚える場面があった。アルバムをめくる時のように。

＜忘れられない保育シーン＞

今から１０年前、我が家の子どもが通っていた保育園の運動会での出来事である。天気は快晴。近くの小学校を借り、園児用にグラウンドが整備されていた。人数は園児と保護者を合わせると 400 名ぐらいだったろうか。

年長さんの種目の中に、跳び箱を跳ぶ競技があった。その日のために練習を重ねたのであろう。かなり高く感じる跳び箱がセットされていた。これまでの成果を見てもらおうと、子ども達も先生達も張り切っている。

順調に子ども達は跳び箱をクリアし、そのたびに小さな拍手が起きる。ほほえましい雰囲気の中、順調にプログラムが消化されていくように見えた。

その中で、どうしても成功しない男の子がいた。担任の先生の指示で、失敗するともう一度スタート位置に戻り、再チャレンジするのであるが、なかなか上手くいかない。

3 回、4 回とやり直しが続いていくうちに、周りの雰囲気が変わっていくのがわかった。「もう、無理では・・」「何もそこまで・・」という空気が流れ始めていた。私自身も「もし成功しなかったらどうするのだろうか」と考え始めていた。

ついに跳んだ

6 回目だったのか、10 回目だったのかはわからない。記憶の中では音楽も鳴っていない。周りが固唾をのんで見守る中、ついに男の子が跳んだのである。成功したのである。

その瞬間、ギャラリーはオリンピックの体操競技で金メダルを決めた場所に立ちあったかのごとく、歓声をあげ、ガッツポーズをした。ほぼ全員がである。

跳び箱を跳んだ男の子はというと、とびっきりの笑顔を見せたまま、担任の先生のところへ走っていった。担任の先生も子どもに駆け寄り、全身でその子を抱きしめた。時間や進行を気にする者などいない。

感動の渦の中、私も落涙せぬように違う景色を見た。

担任の先生は、日頃の練習の様子からその子が必ず跳ぶことを確信していたのであろう。もし跳べなかったら・・いや、成功するまで励まし続け、周りも応援したに違いない。

＜保育科の仕事＞

それにしても、現代においてこれほどまでに純粋に感動できる営みがあるのだろうか。前方に映し出される映像と記憶のアルバムがいつしか重なっていた。

講演を聞いている学生たちが、あの保育園の先生のような保育士さんになってくれたら、どんなにすばらしいことだろう。

保育の仕事に関われることは幸せな事だと思う。